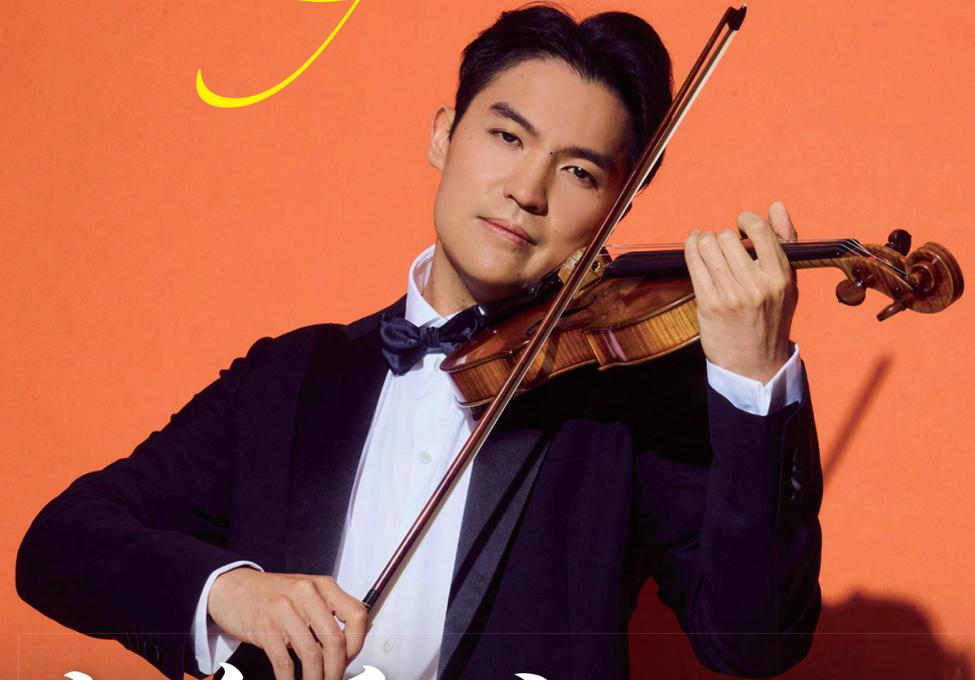


# Ray CHEN

PLAYS 8 SEASONS



## レイ・チェン

# 2つの「四季」

2026年2月17日(火) 19:30開演  
すみだトリフォニーホール 大ホール  
7:30p.m., Tuesday, February 17, 2026 at Sumida Triphony Hall

主催：ジャパン・アーツ

共催：すみだトリフォニーホール（公益財団法人墨田区文化振興財団）

後援：AUSTRALIAN EMBASSY TOKYO オーストラリア大使館

協力：ユニバーサル ミュージック

©Decca Records

## ARTIST SUPPORT

### 2025年度ご支援いただいた皆さま

#### <年間サポート>【個人サポーター】

朝妻 幸雄 天野 雅子 伊藤 直美 M.I. 岩村 和央 K.U. 上村 憲裕 内永 太洋 榎本 英二 Y.E.  
K.O. 大原 志津子 片山 由美子 K.K. 神田 尚子 北村 眞 工藤 章子 小林 真希子 R.K. 相良 延利  
新良 康司 鈴木 忠明 M.T. R.T. 武田 健二 伊達 朱実 田中 治郎 東條 Lilly K.T.  
トゥルーラブ 真智子 苫米地 英人 K.N. 中村 京子 E.N. 児子 弥生 S.N. 長谷川 智子 A.H. T.H.  
樋口 美枝子 M.H. 平山 美由紀 藤野 盾臣 細沼 康子 堀之内 優子 M.H. 松尾 芳樹 E.M. K.M.  
真野 美千代 三木谷 晴子 水野 靖彦 安田 牧子 山川 和子 山崎 明日香 横谷 雅子 Akiko Yoshikawa Y.Y.  
(匿名希望 25名)

#### <年間サポート>【法人サポーター】

三和プリンティング株式会社 株式会社 青林堂  
三井住友カード株式会社 ロイヤルリゾート株式会社  
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント きづきアセット株式会社  
株式会社ロジックアンドエモーション ライフプラン株式会社

2026年1月31日現在 敬称略



詳細はこちらをご覧ください。

#### お知らせ

現在2025年度年間サポートを受付中です。詳細は、ジャパン・アーツの公式WEBサイトおよび公演チラシ挟み込みの申込用紙等をご覧ください。

株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 TEL.03-3499-7720 (平日11:00~17:00 年末年始を除く)

## PROGRAM

### ヴィヴァルディ：協奏曲集「四季」

A. Vivaldi: Violin Concertos "The Four Seasons"

#### ～ ヴァイオリン協奏曲 ホ長調「春」 Op.8-1

"Spring" in E major, Op.8-1

第1楽章：アレグロ	1st Mov.: Allegro
第2楽章：ラルゴ	2nd Mov.: Largo
第3楽章：アレグロ	3rd Mov.: Allegro

#### ピアソラ：ブエノスアイレスの四季

A. Piazzolla: The Four Seasons of Buenos Aires

#### ～ 「ブエノスアイレスの夏」 Summer in Buenos Aires

#### ～ ヴァイオリン協奏曲 小短調「夏」 Op.8-2

"Summer" in G minor, Op.8-2

第1楽章：アレグロ・ノン・モルト	1st Mov.: Allegro non molto
第2楽章：アダージョ	2nd Mov.: Adagio
第3楽章：プレスト	3rd Mov.: Presto

#### ～ 「ブエノスアイレスの秋」 Autumn in Buenos Aires

#### ～ ヴァイオリン協奏曲 へ長調「秋」 Op.8-3

"Autumn" in F major, Op.8-3

第1楽章：アレグロ	1st Mov.: Allegro
第2楽章：アダージョ・モルト	2nd Mov.: Adagio molto
第3楽章：アレグロ	3rd Mov.: Allegro

#### ～ 「ブエノスアイレスの冬」 Winter in Buenos Aires

#### ～ ヴァイオリン協奏曲 へ短調「冬」 Op.8-4

"Winter" in F minor, Op.8-4

第1楽章：アレグロ・ノン・モルト	1st Mov.: Allegro non molto
第2楽章：ラルゴ	2nd Mov.: Largo
第3楽章：アレグロ	3rd Mov.: Allegro

#### ～ 「ブエノスアイレスの春」 Spring in Buenos Aires

※本公演には休憩はございません。

## PROFILE



21世紀のクラシック音楽家の定義を変えるヴァイオリニスト。現代テクノロジーによる新しい機会を活用し、ソーシャル・メディアに登場することで、アーティストとファンとの新たな関わり方を示す先駆者となっている。

台湾に生まれ、オーストラリアで育つ。15歳でカーティス音楽院へ入学。2008年ユーディ・メニューイン国際コンクールと2009年エリザベート王妃国際コンクールでの優勝をきっかけに、注目を浴び始め、ヨーロッパ、アジア、アメリカ、オーストラリアでキャリアを築いている。

2017年にデッカ・クラシックスと専属契約。これまでに、ロンドン響、ゲヴァントハウス管、ミュンヘンフィル、ニューヨーク・フィル、サンフランシスコ響等と共演。また、シャイー、V. ユロフスキ、M. ホーネック、K. ペトレンコなどの指揮者と共演している。2012年から2015年まで、ドルトムント・コンツェルトハウスのレジデントを務め、2017/18シーズンは、ベルリン放送交響楽団の「アーティスト・フォーカス」の一人となった。

近年、レイ・チェンは、世界中のミュージシャンや学習者が一緒に練習する意欲を高めることを目的とした独立系スタートアップ、「Tonic」\*を共同設立した。音楽教育に対しても非常に献身的で、音楽とコメディを組み合わせたビデオ・シリーズを自ら作製し、音楽を志す学生たちの教育に役立てている。

これまで、かつてヤッシャ・ハイフェッツが所有していた1714年製ストラディヴァリウス「ドルフィン」を、日本音楽財団のご厚意により使用。2025年より音楽人生の新たな一歩として、希少なヴァイオリンを探求し、これまでに24挺以上のストラディヴァリウスおよびガールネリ・デル・ジェスを試奏。現在は、その中でも最も惹かれた1727年製ストラディヴァリウスを使用。

Tonic : <https://www.jointonic.com/>

\* TONICはレイ・チェンが共同開発したアプリ。音楽家や個人が作品や練習を共有できるプラットフォームで、練習中の音の発信や他の人の練習を聞く、練習メニューの集計などができる機能がある。



Ray Chen

## PROFILE

### ヴィルトゥオージ TOKYO 2026 (弦楽合奏) Virtuosi TOKYO 2026, String Ensemble

ヴィルトゥオージ TOKYO 2026は、レイ・チェンとの共演を目的に、水谷晃(東京都交響楽団コンサートマスター)を中心に結成された弦楽アンサンブルである。メンバーには、日本を代表する主要プロオーケストラの首席奏者たちが名を連ねている。

[ヴァイオリン] 水谷晃 戸原直 依田真宣 對馬哲男 城戸かれん 伊東翔太  
鈴木浩司 塚本禎

[ヴィオラ] デイヴィッド・メイソン 木下雄介 杉浦文

[チェロ] 伊藤文嗣 森山涼介

[コントラバス] 石川浩之 高橋洋太

[チェンバロ] 大井駿



**水谷 晃 Akira Mizutani** (ヴァイオリン/コンサートマスター, Violin/Concertmaster)  
大分市生まれ。桐朋学園大学を首席で卒業。第57回ミュンヘン国際音楽コンクール弦楽四重奏部門で第3位入賞。東京都交響楽団コンサートマスター、オーケストラ・アンサンブル金沢客員コンサートマスター、ゆふいん音楽祭音楽監督。



**戸原 直 Nao Tohara** (ヴァイオリン, Violin)  
東京藝術大学音楽学部を卒業、同大学大学院を修了。リューベック音楽大学にてドイツ国家演奏家資格を取得。読売日本交響楽団コンサートマスター。



**依田 真宣 Masanobu Yoda** (ヴァイオリン, Violin)  
東京藝術大学及び、同大学院修士課程を修了。在学中に福島賞、安宅賞を受賞。水戸室内管弦楽団、2015年よりサイトウ・キネン・オーケストラに出演している。現在、東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター。



**對馬 哲男 Tetsuo Tsushima** (ヴァイオリン, Violin)  
東京藝術大学音楽学部器楽科卒業後、同大学音楽研究科修士課程修了。第60回全日本学生音楽コンクール全国大会第1位。読売日本交響楽団次席第1ヴァイオリン奏者。



**城戸 かれん Karen Kido** (ヴァイオリン, Violin)  
ミケランジェロ・アバド国際コンクール第1位、日本音楽コンクール第2位ほか多数受賞。東京藝術大学を首席で卒業し、同大学院音楽研究科修士課程を修了。紀尾井ホール室内管弦楽団メンバー。



**伊東 翔太 Shota Ito** (ヴァイオリン, Violin)  
東京音楽大学を特別特待生として卒業。第27回日本クラシック音楽コンクールアンサンブル部門第2位(最高位)。東京都交響楽団第1ヴァイオリン奏者。



**鈴木 浩司 Koji Suzuki** (ヴァイオリン, Violin)  
北九州市生まれ。愛知県立芸術大学を卒業後、神奈川フィルハーモニー管弦楽団を経て、現在東京交響楽団に在籍。弦楽アンサンブル「石田組」「東京グランド・ソロイスト」等の公演に多数出演。



**塚本 禎 Tei Tsukamoto** (ヴァイオリン, Violin)  
東京音楽大学および大学院を奨学生として卒業。2024年フランコ・グッリ国際コンクール第1位、藤沢市生涯学習特別貢献賞受賞。東京音楽大学アーティストディプロマコース在籍。



**デイヴィッド・メイソン David Mason** (ヴィオラ, Viola)  
米国ウイスコンシン州出身。ニューイングランド音楽院にて学士号を、2015年にはイェール大学にて音楽修士号を取得した。東京都交響楽団ヴィオラ奏者。



**木下 雄介 Yusuke Kinoshita** (ヴィオラ, Viola)  
岡山市生まれ。マンチェスター・チータムズ音楽学校、英国王立ノーザン音楽大学を卒業。2016-2021年大阪フィルハーモニー交響楽団首席ヴィオラ奏者。



**杉浦 文 Aya Sugiura** (ヴィオラ, Viola)  
東京藝術大学を卒業後、アントワープ王立音楽院ポストグラデュエイト課程修了。東京フィルハーモニー交響楽団ヴィオラフォアシュペーラー奏者。



**伊藤 文嗣 Fumitsugu Ito** (チェロ, Cello)  
東京交響楽団ソロ首席チェロ奏者。サイトウ・キネン・オーケストラ、紀尾井ホール室内管弦楽団等に出演。ソリストとして東京交響楽団とJ・ノット指揮のもと「R.シュトラウス：ドン・キホーテ」「ブーレーズ：メサジェスキ」他多数共演。



**森山 涼介 Ryosuke Moriyama** (チェロ, Cello)  
東京藝術大学大学院修士課程修了。アフィニス文化財団海外研修員としてミュンヘンへ留学。東京都交響楽団、Quartet Explloce、ゼフィルス・ピアノ五重奏団等の一員として活動を行う。



**石川 浩之 Hiroyuki Ishikawa** (コントラバス, Double Bass)  
水戸市出身。東京藝術大学卒業。1998-2003年大阪フィルハーモニー交響楽団に、その後2008年まで神戸市室内管弦楽団に在籍。2009年より読売日本交響楽団に在籍。



**高橋 洋太 Yota Takahashi** (コントラバス, Double Bass)  
東京都交響楽団コントラバス奏者。2022年自身初のアルバムをリリース。2025年6月から始まった「青い海と森の音楽祭」では芸術総監督補佐・音楽主幹補佐を務める。



**大井 駿 Shun Oi** (チェンバロ, Harpsichord)  
ミュンヘン音楽演劇大学古楽科、パーゼル・スコラカントルムにてチェンバロ、フォルテピアノを学ぶ。指揮者、通奏低音奏者として都響、読響、東響、東フィル、モーツァルテウム管、マイニンゲン管等と共演。

## 2つの「四季」

The Eight Seasons

## 日本への想いによせて

Reflections for Japan

初めて日本を訪れたのは、8歳の時でした。

1998年、長野冬季オリンピックの開会式記念コンサートでの演奏に招かれたのです。それは遠い記憶でありながら、今もなお、鮮やかに蘇るような体験でした。私にとっては世界的なイベントのためにオーストラリアを離れた初めての機会であり、さらに忘れられないのが、初めて雪を見たことでした。

その時までの私にとって、冬は写真や想像、物語の中だけに存在していました。アニメの中では、雪は詩的で、なにやら象徴的かつ少々非現実的に描かれていたことが多かった気がします。長野の地に立ってみて、手に染み入るような寒さを感じながら新雪に覆われて柔らかく静まりかえる雪景色を見て、冬が突然、具体的なものとなりました——触れることのできる、現実。当時はまだ気付いてはいませんでした。その瞬間こそが、大袈裟ではなく——音楽こそが私の人生だと静かに決意した瞬間でした。

その旅で、母と私は松本でホスト・ファミリーの家に滞在しましたが、そこは稲作農家で、彼らの友人たちの多くも、さまざまな果物や野菜を栽培していました。そこでの経験は、今でいえば“農家直送”と言われるものでしょうが、当時は当たり前前の日常だったのです。完全にオーガニックで商業化されてもおらず、大地と深く結びついていました。そして彼らの生き方がまさに季節そのものに形作られていることを学んだのです。冬は休息と遊びの時間でしたが、次なる周期がもたらすものを見据えて備える時期でもありました。

アメリカで季節を経験するようになるよりずっと以前に、日本はすでに私に“季節と共に生きる”ことの意味を教えてくれたのです。

オーストラリアで育った自分が経験した季節は、もう少しシンプルな感覚でした。猛烈な暑さや突然の雹の嵐に遮られる夏に続き、あまり冬とは思えないような涼しい時期が続きます。その自然は、異なる形で力強くて広大で明るく、世界で最も危険で毒性の強い生き物が生息しており、それをオーストラリア人は誇りとユーモアを交えて語ったりします。けれども、一年を通しての季節の移り変わりは、明確な章立てのように訪れません。変化は緩やかで、ほとんど連続しており、子どもの頃はそれが当たり前だと思っていました。

日本で初めて、私は季節が明確な感情の状態と結びついているのを体験したのです。人々が遠くまで足を運んで季節ごとの瞬間を目撃し、桜の木の下を歩き、秋の紅葉を求めて旅をして、初雪に足を止めるということを知りました。季節はまた、単に観察するだけのものではなく、認識され、尊重されて共有されるものでした。春は期待感を運んできて、夏は激しさと解放感を、秋は内省を促し、冬は静寂を求めます。この移ろいには、単なる天候の変化だけではなく、時間をどのように感じるかということも反映されていました。

そういった経験の後、私は度々、日本に戻りたいと思うようになりました。演奏するためだけでなく、あのような生き方と再び繋がりをもちたかったのです。いろいろな意味で、日本は私にとっての感情的・



レイ・チェン

(訳：江口理恵)

芸術的な故郷となりました。幼い頃から無数のアニメを見て育ち、想像力豊かで深い人間味のある物語を通して、勇気、忍耐、優しさなどの価値観を吸収しました。後に、異世界転生というアニメのジャンルに特に惹かれるようになったのですが、私が共感したのは現実逃避の幻想ではなく、そこに内省が求められる点でした。馴染み深いものがすべて剥ぎ取られた時、何が残るのだろうか? どういった技術や価値観、そして繋がりが真に自分のものであると言えるのでしょうか。おそらく、それが旅や演奏、成長における過程で学んだことを、ある場所から次へと携えていく自分自身の経験と重なって、心に響いたのではないかと思います。

時がたつにつれ、日本で演奏することが、私の音楽との関わり方を深く形成するようになりました。私は日本で、異なる聴き方を学び、静寂と集中、そして抑制を大切に思うようになりました。ホールには時折、針が落ちる音さえ聴こえてしまいそうなほど完璧な静寂の瞬間が訪れます。その瞬間、コンサートは瞑想的なものになり、私たち自身よりも大きな何かを共に感じる経験をします。

幼い頃から、私は常にヴィヴァルディの協奏曲集『四季』のなかでも「夏」に特別な親しみを感じてきました。それがもっとも技巧的で劇的な協奏曲だからではなく、自分にとって馴染み深いものだったからです。私は暖かさのなかで育ち、本能的に暑さを理解できました。他の季節を理解するには、多くを求められました。演奏するのにより強く想像力を働かせ、見たことのない収穫の季節や、感じたことのない冬を心に描く必要があったのです。

当時、私は日本に来る前からすでに『四季』を弾いていました。曲を習い始めたのは7歳の頃からで、収穫の季節がどのような感覚なのか、真冬の景色が実際にはどう見えるのかなどをほんとうに理解しようと苦慮したことを覚えています。日本への旅は絶妙なタイミングでやってきました。雪を体験し、季節の移ろいを感じ、人々が自然と共生する姿を実際に目にすることで、それまで抽象的でしかなかったイメージに形と質感が与えられました。

この慣れ親しんだものと、そうではないものとの対比という概念が私のなかに残り続け、今日の協奏曲集『四季』の聴き方を形作っています。

ヴィヴァルディはそれぞれの季節を独自の世界として鮮明に定義し、豊かなイメージとして提示します。春は勢いよく開花し、夏は熱に浮かされ、秋は踊り、冬は静寂へと退く。その一方、ピアソラの『ブエノスアイレスの四季』は、より連続的であると感じます。季節は存在しますが、同じ都市の異なる陰影として、移ろう光を通して見る同じ感情の声として現れます。変化は少なく、連続性が勝っています。

私は常に、日本での古きものと新しきものが隣り合って存在していることや、他国から来たものを丁寧に、精密に、そして敬意をもって再構築しながら、深い伝統文化のなかで革新や現代的な思想が自然と生まれる余地を残すやり方を好んできました。そういった意味で、ヴィヴァルディとピアソラを並べたプログラムは、私にとっては自然なことと思えます。このコンサートは、ふたりの作曲家とふたつの音楽言語のみならず、過去を尊重しながら前進を続ける、伝統と再発明という考えを反映しています。

毎年日本を訪れていますが、ここでのコンサートは毎回、ある意味で帰郷のようであると感じます。ここで私は初めて四季、人々、文化、食、そして何よりも音楽を分かち合うという行為に恋をしました。今夜、皆さまにはこれらの季節を聴いていただくだけでなく、そこに織り込まれた経験や記憶、静かなる賛辞を感じていただければ幸いです。

この旅路をご一緒してくださることに、感謝を申し上げます。

